

穂久邇文庫蔵堤中納言物語について

土 岐 武 治

この写本は堤中納言物語十冊本に属し、現存諸本中重要な最古本の一つである。今日まで学界に未紹介のまゝ、穂久邇文庫に蔵せられてゐるのを、愛知大学教授久曾神昇氏の御世話によつて、この本を調査研究することを得た。区々たる管見、何等かの参考とならば幸甚である。

(一)

穂久邇文庫蔵堤中納言物語は、楮紙の紙綴、縦二十六種、横十九種二耗の大きさで、この本はもと久邇宮家の御所蔵なされた十冊の写本である。表紙には各冊とも題簽がなく、それ〴〵次のやうな題名が記入されてゐる。

堤中納言 花さくらおる少将
 堤中納言 このついで
 堤中納言 むしめつる姫君
 堤中納言 ほと〴〵のけさう
 堤中納言 あふさかこえぬ権中納言
 堤中納言 貝あはせ
 堤中納言 おもはぬかたにとまりする少将

堤中納言 はなたの女御
 堤中納言 はいすみ
 堤中納言 よしなしこと

十篇各冊とも、その本の首尾に一枚づゝの礼紙をおき、第二枚目の表から本文を記してゐるが、各冊とも内題は記されてゐない。墨付は、花さくらをる少将篇六丁、このついで篇五丁、むしめつる姫君篇十一丁、ほと〴〵のけさう篇四丁、あふさかこえぬ権中納言篇十丁、貝あはせ八丁、おもはぬかたにとまりする少将篇十一丁、はなたの女御篇十丁、はいすみ篇十一丁、よしなしこと篇七丁で、総計八十二丁となつてゐる。

本文は片面十行、一行の字数は二十字内外で、句読点なく、和歌は一字分下げて記し、その歌の最後が次の行に亘る時には、前の行と同一の高さにし、そのあと直ちに本文を続けるといふ体裁になつてゐる。但し、「むしめつる姫君」「あふさかこえぬ権中納言」「はなたの女御」の三篇に見える歌は、すべて本文を二字分下げて、二行に亘つて書かれてあり、また「おもはぬかたにとまりする少将」

篇に見える四首の歌の中、最初の二首だけは上述の三篇に見える歌の形式と同じで、残る二首の歌は、他篇のそれと同一になつてゐる。「よしなしごと」篇の結尾に見える「冬こもる空の……」の断章は、紙を改めて表十行と、その裏二行に亘つて書かれてある。本の諸処に虫喰ひの跡があるが、本文にはそれの支障はない。本文中、誤写の箇所へは「ミセケチ」、不審な箇所へは稀に「本ノマ、」「:敷」などの傍註が施されてをり、また本文上重要な箇所へは、他の一本をもつて校合してゐる。

この本は、十冊本根幹の重要な写本であつて、多少改竄の跡も見えるが、書写年代は、書体その他から推して寛永前後のものと考えられる。奥書は伝へてない。

(二)

堤中納言物語に於ける現存諸本の本文系統を分類すれば、承譜建設上三部門となる。右の第一門に属する諸本は、契沖校本、今井似閑自筆本、明静院本(散佚)、慈延自筆本、九条家旧蔵本、高松宮家御所蔵本、宮内庁書陵部蔵本、穂久邇文庫本、天理図書館岡本館校本、岩瀬文庫本、矢野家旧蔵本、広島大学図書館蔵野家旧蔵本、島原秘蔵本、上野図書館蔵榊原旧蔵本、京都大学国語国文研究室蔵本、尊経閣文庫蔵元禄本、尊経閣文庫蔵天和本、静嘉堂文庫蔵富士谷御校本などで、これらの十冊本に属する写本群を、本文上の依存関係から更に「類」「種」と委細に分類すれば、次の通りになる。

第一類

第一門

第一種

契沖校本
今井似閑自筆本
明静院蔵本(散佚)
慈延自筆本

第二類

第一種

高松宮家御所蔵本

宮内庁書陵部蔵本(十冊)

第二種

穂久邇文庫蔵本

天理図書館岡本館蔵本

第三類

岩瀬文庫蔵本

広島大学図書館蔵浅野家蔵本

矢野旧蔵本

第四類

黒川家旧蔵池田亀鑑博士蔵本

島原秘蔵本

上野図書館蔵榊原家旧蔵本

京都大学国語国文研究室蔵本

第五類

尊経閣蔵元禄本

第三類

略号
(高) (陵) (穂) (巖) (體) (矢) (黒) (島) (榊) (京) (元)

第一種

九条家旧蔵本

第四類

第一種

尊経閣文庫蔵天和本

静嘉堂文庫蔵富士谷御校本

上記の諸本一覽表中、第一類の第一種、第二類の第一種、第二種、第三種に從属する写本は、誤脱、改竄などの誤謬も僅少で、堤中納言物語の現存諸本の系譜上、根幹をなす重要な善本であり、しかも此等の諸本は、相互に近似した血族關係を有してゐる。これらの微細な諸点については、既に「典籍」第十七冊、第十八冊、第十九冊、第二十冊所載、拙稿「十冊本堤中納言物語とその研究」に詳述したので、小稿にはその重複を避けて言及しないことにする。

右の図表に挙示する如く、穂久邇文庫本は、天理図書館蔵岡本館校合本と最も近似した本文關係を有してゐる。この天理図書館蔵岡本館校合本について略述すれば、この本は、佐々木信綱博士旧蔵本で、冊数上一冊となつてゐるが、祖本の十冊本を書写の際、取扱上一冊に綴り合せたものである。本の大きさは、縦二十二種八耗、横十九種九耗で、紙質は楮紙の袋綴、片面十行、一行の字数は十七字内外で、表紙の中央に「堤中納言物語」と記し、各篇の最初に見える札紙の表中央に「堤中納言」と、その左側には、該篇の内題を記入してゐる。但し、十篇の配列順序は、諸本と異つて、次の通りになつてゐる。

はいすみ

ほと／＼のけさう

このついで

貝あはせ

はなたの女御

あふさかこえぬ権中納言

花桜をる少将

よしなしこと

むしめつる姫君

おもはぬかたにとまりする少将

元來堤中納言物語の諸本に伝へる十篇の配列順序の種類を整理すれば、(一)契沖校本 (二)尊経閣文庫蔵元禄本 (三)流布本 (四)天理図書館蔵岡本館校合本 (五)高松宮家御所蔵本系統(順序なし) (六)黒川家旧蔵池田龜鑑博士蔵本との六種類の系統になるが、天理図書館本は、特徴あるその一種をなしてゐる。

(註一) 立命館文学、昭和三十年八月号所載、拙稿「小山多乎理旧蔵本とその系統」、立命館文学、昭和三十一年、三月号所載、拙稿「堤中納言物語の伝本研究」参照。

(三)

前項に登載する穂久邇文庫蔵本と天理図書館蔵岡本館校合本との依存關係を証拠だてる第一条件として、此等両本の諸本に伝へぬ共通な特徴異文を、左に列記して見ることにする。

○ほど／＼のけさう

はか／＼しき事ならしかしとあまたみゆる中に(穂・館)

〔考異〕 (一)あまに―あまた諸本

○あふさか越えぬ権中納言

おほせらるゝをりも侍けるはとてにてからすうちわらひて

(穂・髓)

〔考異〕 (一)にてからす―にくからす諸本

○かひあはせ

まろか御まへはたゝわりきみ―ところにていみしくわりなくお

ほゆれは(穂・髓・岩矢)

〔考異〕 (一)わりきみ―わかきみ諸本

○おもはぬかたにとまりする少将

てならひになれにし心をらんなをやうにうちなげかれて(穂・

髓)

〔考異〕 (一)をらん―なるらん諸本

○はいすみ

みるよりかなしてうちたゝけはこの女はきつつにしよりさらに

(穂・髓・岩・矢・浅)

〔考異〕 (一)かなして―かなしくて諸本

上例の特殊異文を考異の条に善示する諸本の該本文と対照して吟味すれば「あまに―あまた」、「にてからす―にくからす」、「わりきみ―わかきみ」などの如く、字形の近似する「た」を「に」に、「く」を「て」になど書写の際に無意識的に見誤つたものと考へられるし、また「をらん―なるらん」、「かなして―かなしくて」などの「なる」

「しく」の複字はそれ／＼「を」「し」の単字へ、書写の際に紛れたものと推測される。このやうな共通誤謬の独自異文を有する両本は、一体共通の祖先から伝来された兄弟関係の身分か、それとも直接親子関係の血縁を有するものかを、次に調査して見ることにする。これが処置として、両写本の本文上互に異なる箇所を検討することにするが、それらを指摘すれば次の通りになる。

○はなざくら折る少将

あやしかりける事かななどの給はなの木とも、さきみられたる

(穂)

あやしかりける事かな…どの給はなの木とも、さきみられたる

(髓)

○このついで

なをく、せちにいふめれはさらはとてきちようの(穂)

なをい、せちにいふめれはさらはとてきちようの(髓)

○むしめづる姫君

てふになりぬれはいともそて、てあたになりぬるをや(穂)

てふになりぬれはいともそて、てあたになりぬるをや(髓)

いとよつかすけさうしたるはきよけにはありぬへし(穂)

いとよつかすけさうしたるはきよけにはあるぬへし(髓)

○ほと／＼のけさう

いまやうのてのかとあるなにかきみたりたれば(穂・諸本)

いまやうのてのことあるなにかきみたりたれば(髓)

○あふさかこえぬごん中納言

そゝのかしきゆれはものうなからくるまさしよせよなどの給
を(穂・諸本)
そゝのかしきゆれはものうきからくるまさしよせよなどの給
を(髓・陵)

うちふし給へれとまどろまれす人はものをやとそ(穂・諸本)
うちふし給へれとまどろまれす人のをやとそ(髓)

○おもはぬかたにとまりする少将

たつね給事もあらんにをりふしなる覧もおほして(穂・柳)
たつね給事もあらんにをりふしあからんもおほして(髓・岩
・矢・陵・高・浅)

めつらしきはなをたちまさりやありけん(穂)
めつらしきはなをたちまさりやありけん(髓)

○はいすみ

いまゝてかくてつれなくうきよをしらぬけしきこそといふ(穂)
いまゝてかくてつれなりうきよをしらぬけしきこそといふ(髓)

かみはつやかにいとうつくしけにてたけはかりなり(穂)
かみはつやかにいとうつくしけにてたけはかりなり(髓)

このつかふ女をしるへにてはるくどさしてゆけは(穂)
このつかふ女をしるへにてはるくどさしてゆけは(髓)

うちくちおほひてゆふまくれにしたたりとおもひて(穂)
うちくちおほひてゆふまくれそしたり(髓・陵)

おひえてちゝはゝもたふれふしぬ(穂)
おひえてちゝはゝもたふれふしぬ(髓)

○よしなしこと

なをよこそいなひかりよりもほとなく(穂・諸本)
なをよこそいなひかりよりもほとなく(髓)

これなくはあしろひやうふのやれたるにかし給へ(穂)
これなくはあしろひやうふのやれたるにかし給へ(髓)

右に掲載する両本の用例異文を整理して比較吟味すれば、はなざ
くら折る少将篇「ともの―とも(上段は「穂」、下段は「髓」、以下
同じ)」、このついで篇「なを―なをし」、むしめづるひめぎみ
篇「そてにて―そてに」「したる―したら」、ほとんくのけさう篇
「かとある―ことある」、あふさかこえぬごん中納言篇「ものうな―
ものうき」「人はもの―人も」、おもはぬかたにとまりする少将篇「
なる覧―あからん」「ありけん―ありけん」、はいずみ篇「つれな
く―つれなり」「うつくしけに―うつくしけに」「しるへ―しまへ」「ゆ
ふまくれに―ゆふまくれそ」「おひえ―おひは」、よしなしこと篇「
よこそ―こそ」「これ―ここ」などの近似せる相互の異文中、天
理図書館蔵岡本館校本の方は、類似せる字形の誤写、見誤りによ
る脱落などの誤謬が多いことは一瞥して指摘しえられるのである。

従つて両本中、穂久邇文庫本は天理図書館蔵岡本監校合本に比較し、伝本の階級上、優位に存するといへるのである。

いま右の異文の転化現象を図表で示すと、次のやうになる。

書写の時、無意識的になされた転化

(一)類似せる字形の混同

(穂久邇本) (監校本)

- したる———したら
- か(可)とある———ことある
- ものうな(奈)———ものうき(支)
- なるらん———あからん
- つれなく(具)———つれなり(里)
- しる(流)へ———しま(満)へ
- ゆふまくれに(丹)———ゆふまくれそ(曾)
- おひえ(衣)———おひは(者)
- よ(与)こそ———に(丹)こそ
- こそ———ここ

(二)過失と思はれる脱落

- ともの———とも
- なをへ———なをし
- そてにて———そてに
- 人はもの———人も
- ありけんに———ありけん

穂久邇文庫蔵堤中納言物語について

○うつく、しげに———うつしげに

両本の異本総数は十六箇所となつてゐるが、これは書写上親子關係をなす契沖校本と今井似閑本、岩瀬文庫本と矢野旧蔵本、高松宮家御所蔵本と書陵部本、静嘉堂文庫蔵横山由清本と教育大学図書館蔵本、無窮会図書館蔵清水浜臣本と同図書館蔵本、同上清水浜臣本と岩下貞融本、静嘉堂文庫蔵大野広城本と内閣文庫本などの相互の異同総数と略々同率を示してゐるのである。

両本に於ける独自の共通異文、転化現象の内容、両本の階級關係及び異同総数の比率などを総合して両本の書写關係を考察すれば、穂久邇文庫本と天理図書館蔵岡本監校合本とに於ける直接の書写關係を認容して然るべきと考へられる。更にこれらの血縁關係を傍証する外部条件を取り上げることとする。両本の題号は「堤中納言」と伝へ、十篇の配列順序は共になく、本文の枚数・行数・字詰・漢字・仮名の字体は全く符合してゐるのであるが、殊に次に記載する本文中の諸処に伝へる墨の傍註に至るまで、両本は全く一致してゐる。

○花ざくらをる少将

一ウ一 はやくここえにもものいひし人

一ウ七 人ありともものせをよ

三ウ五 かたにそはいしふいとなれば

五オ六 あれたるやと二字不見はいかて

〇このついで

一オ四 よへよりのにゑさふらひしほとに

一オ六 こうはいのしたにうつさせ給し万敷

二ウ六 ものへまうつるりなるへしる

〇むしめつる姫君

一ウ一〇 このむしとをもを朝あしたゆふへ夕にあひし給も敷

二ウ一〇 さはありとむむをときと

七オ六 いかてみてし哉〇思と

〇あふさかこえぬ権中納言

四ウ二 ゆくほとに持もにやならんと

〇貝あはせ

二ウ三 まろをたにお〇さむとあらは不敷

二ウ六 ようなきこと〇をいひてはイ

七ウ六 昨日の子こしもはしる

〇おもはぬかたにとまりする少将

二ウ八 人の御心もいとさたのみかたく

五オ二 さまに給ふにさすらふもよの人きゝ思らん

五ウ六 このしのひ〇御事をも大將殿に

〇はなだの女御芭蕉葉

三ウ六 うゑを芭蕉葉はせをははときこえん

四オ三 にはは不分明イにはひにものはなけかしきかな

五ウ三 きむかへりつゝなげかるゝかなえ

六オ一 ねいりぬるけはひをきてイつゝも

六オ八 いかてかくもこそふかんらい

〇はいすみ

五オ六 かみはつやかにていとうつくしけにてや敷

九ウ九 ゆまくれそしたてたりふ

〇よしなしこと

二ウ三 もろこしの五台山こたいさんしらすきの

五オ四 あまのたしたてのたためこ

五オ五 みののはしまかのかもさかり

六オ六 かこ子うりてえあさん本ノマ

たゞ本の冊数上、穂久邇文庫本は十冊で、天理図書館蔵岡本館校合本は一冊であると云ふ相違がある。堤中納物語の現存諸本中、直接の血族關係をなす岩瀬文庫本と矢野家旧蔵本に於いて、祖本の岩瀬文庫本は十冊からなり、これを書写した矢野家旧蔵本は十冊を一冊に綴り合はせた体裁になつてをり、十冊の契沖校本と二冊の今井似閑本も、右と同様な書写關係に置かれてゐるのである。また一冊の島原秘蔵本、尊経閣文庫蔵元禄本、同文庫蔵天和本、静嘉堂文庫

蔵富士谷御校本なども、共に十冊本の祖本を書写し、取扱上一冊に纏められた形跡が歴然としてゐる。これによつて兩本の書写關係も上例の場合と同じ条件に成立されたものと考えられる。天理図書館本の各篇の最初には紙を改め、その紙の表中央には「堤中納言」と書き、その左側に当該篇名が記入されてゐるが、穂久邇文庫本も同様に各冊の表紙には、このやうな仕方て記されてゐる。しかも前述の通り穂久邇文庫本は天理図書館本より優位な階級写本となつてゐるのである。

四

前項に詳説する如く、穂久邇文庫本は、書写上、天理図書館蔵岡本體校合本の祖本の身分を有し、兩本は本文上、親密な血族關係によつて結ばれてゐる。しかも本文の異同上、この本は第二類第一種の高松宮家御所蔵本、図書寮書陵部蔵本と、同類第三種の岩瀬文庫本、矢野家旧蔵本、広島大学蔵淺野家旧蔵本との中間に位する故に天理図書館本と併合して、これらの兩本を第二類第二種の写本群と規定したのである。前項に記載する第三類の同族諸本の本文は、各本の僅少な特徴異文及び各種属に於ける写本群の共通異文などを除く以外、殆ど一致した本文關係をなしてゐる。いま穂久邇文庫本の此等諸本に伝へぬ異文を挙示すれば、次の通りになる。

○おもはぬかたにとまりする少将

てならひになれし心なるらんなどやうにうちなげかれて

〔考異〕 (-)なと—なほ 高、陵、麓、岩、矢、浅
○よしなしこと

このくにはなをちかしもろこしのこたいさんしらすのみねに

穂久邇文庫蔵堤中納言物語について

(一) されそれをもなをけちか

〔考異〕 (-)され—まれ 現存諸本

右の用例中、「おもはぬかたにとまりする少将」篇に伝へる「なと」には、契沖校本の該本文もこれと同じで、従来の註釈書も、この「なと」の本文に従つて解釈してゐるのである。ただ「よしなしごと」篇の「みねにされ」の「され」は、現存諸本通り「まれ」の類似による誤謬と考へられる。

穂久邇文庫本を含む第二類第一種の高松宮家御所蔵本、図書寮書陵部本、同類第二種の天理図書館蔵岡本體校合本、及び同類第三種の岩瀬文庫本、広島大学蔵淺野家旧蔵本などに見える本物語の題名は、いづれも「堤中納言」とあり、その上十篇の配列順序は示されてゐない。元來堤中納言物語の伝本中に見える本物語の題名には「堤中納言」「堤中納言物語」「つゝみ物語」などあり、また十篇の配列順序内も上述の如く六種類の系統に分れて、そのいづれが原型であるか、これらの問題は未解決の状態になつてゐる。穂久邇文庫本は、上に挙示する同族諸本とともに、右の性格を保持する写本であるだけに、今後堤中納言物語の研究に、種々な問題を提供することになる。しかも此等の同族諸本の共通異本中、「おもはぬかたにとまりする少将」篇の「うせにしむすめ一人あるは右大臣の中將の御め」とこのさゑもんせうといふかめなり」との本文の「中將」は、他の現存諸本では「少将」となつてをり、同篇の「てならひになれにし心なるらんなどやうにうちなげかれて」の「なほ」は、諸本では「なと」と伝へてをり、また同篇の「うすいろのなよゝかなるか